

蛇

岡田美知代

(つゞき)

け共困るのは火事が大好きで、如何した譯か矢張り病氣おせいでもありませんか、些少も變つた處は無く面白可笑しう遊んで居ても、チャンと一つ板鐘が鳴つたが最後、突然立上つて見物に行かうとするので、成可くは引止めてやりませんけれど、油斷して居ると何時の程にか飛び出しては、引くり返へると云ふ始末、つまりキーちゃんのは火癪癪とでも云ふのでせう。

例の焼打ち當座は、お家で皆様注意して、餘り門外へお出しあさあかつたので、幸に何事も無く済みましたが、漸く世間が静まつての或る夕方、八幡町の親類までお使ひに行つた八重ちゃん、あたふた歸つて來て、格子戸を開けるが早いか、

『節衛さん、河母さん、二人とも早く』

私は讀みかけの書物を持つたまゝ、急いで飛び出すと、八重ちゃんの顔色と云つたら無いのです。

『何だらうね此の子は、仰山お聲をおしでかいよ』云

ひく未亡人も出ておいでしたが『如何したの』と心配相、

『だつて如何すればいいの、よう阿母さん、キーちゃん、キーちゃんが今大道で引くり返つてるぢやありませんか』と尙おどく。

『まあ本當?』と私があわてゝ聞きますと、

『アラよくつてよ、虚言ぢやないわ』

『だつてお前、何處で御覧なの』

『八幡町だわ、否私が市が谷を彼の焼けた交番迄來かゝると、それは大變な群集でせう、何だらうと思つてそつと窺くとね、まあ私全く驚ろいちやつたわ、キーちゃんが引くり返つてさ、何だかフー云つちや氣味の悪い泡みたいふもの吐くんですもの、巡査さんが一生懸命世話して、何處の誰だか知つてゐる方は無いかつて尋いてゝよ』

『それでお前教へておあげかへ』

『だつて阿母さん、キーちゃんの額に下駄がのつかりあつかしてゐるんですもの、あんな何だつて随分極りが悪いぢやありませんか』

『何だね、それ處じや無いよ萬一の事があつたら如何

おしだ、本當に馬鹿だねえお前は』

それから奥さんが高さんへ知らせて、康さんの後を小母さんが狂女の様を振り回した様子で駆け出すと、間もなくキーちゃんやんは戸板に乗つて大勢の人に擔かれて歸つて來るやら、其時は大騒ぎしましたか翌日は最早キヨロリとして鼻歌をのです、で火事云へば焼跡でも不可いとい見えるつて大笑ひ。

此通りキーちゃんに至つて毒の無い人でも、時には又これはと驚ろく様を思ひ切つた惡戯もしますので何日でしたか、確か春先きのふ暖かい頃だと覺えて居ます、私は其頃少々神經衰弱の氣味で、如何かすると全身がわく／＼慄へて、それで幾晩も幾晩も眼れぬと云つた有様、學校へも出ないで朝からシワボツをのみ續け、無理に床をのべて臥りましたが、何時の間にか眠つたものと見えて、ふと目を開くと枕元にキーちゃんやんが座つてゐるんで、而して私の驚ろいた顔を見るあり、にやり薄笑ひをして、

『御病氣だつてね、如何ですか』

『え有難う、だつてもまあ私驚ろいてよ』

と間の襖を靜かに開けて入つて被入つたのは奥さん

『オヤまあキーちゃん此處に被居つたの、私は最早先刻御歸りだと思つてましたに』

『ウフ、そつと來てたんですよ』

『まあ嫌だ』

『私は又節衛様が何か仰つたのだと思ひましてね、お白湯でも差上げませうか』

『否』

『少しはおよりの様でしたわ、あの慄えは如何ですの些少はお樂にありまして?』
『えお蔭で大分快くありましたけども、どうもまだ矢張りねえ』

『それませんの、それは不可ませんね……』

『何ですか節衛様も慄えるの、じや僕と同病だ、用心しなにと不可い、酷くあると今に引くりかへるからねえ』

『何ですわキーちゃん、那麼、節衛様のは違ひますよ』と氣の毒相。

私は氣味悪々『キーちゃんあかた最初は甚麼だつてそれで矢張り寢られなかつたの』
『僕幼い時でよく解らないけ共、夜中寢床の中を轉び

廻つちや泣いてたつて、阿母さんが云つてましたよ』
『最早堪りません、顔を枕に打伏せて、嫌な嫌な氣持ちに、其儘底しらの深淵へでも沈んで行くかの様。』
『如何あすつて節衛様、貴氣にあすつては不可ません』奥さんは靜かに慰めて被下る、け共如何したもので、私は恐ろしく氣にかりますので。

『怒つたの僕の事、怒つてゐるの、え節衛さん』
其時は最早キーちゃんの聲は震えて聞えました。

『節衛様は何日かキーちゃん病んだから、何を云つても氣にしないつて云つたじやないの、あれ程仲よくしとき乍ら、今に成つて那麼に怒るんだもの酷いや』
『だつてあかたが除りお事をお云ひですから、つい節衛様を怒らしちまつたんですよ、まあ好いから早くお歸んさい』

『酷いや怒るなんて……覺えてらつしやい今に大嫌ひあものを持つて來るから好い』ふいと立つて歸りました。其翌日私は最早昨日の事も何も忘れて、ボンヤリがのつそり入つて來るのです。

『まあお上んさいよ、今日は何處へお出掛けあすつ

て、些少も被入らなかつたわね』と愛想よく迎えても如何でせう、返事もしませんの、餘りだからつい憎らしく成つて、何か云つて遣り度いとは思ひましたが、眼を据えてじつと私を見入つた其顔の凄さ、それに彼の若い癖に白髪澤山お頭が、まるで針の様に突立つてゐるんですもの、うっかり掛け合つては大變だと思つてわざと何氣無い様に茶の間へ這入ると、すぐ後をついて來て懐ろ手の儘、いつもの通り長火鉢の前へごつかり座るのです。

『節衛様好いお土産、ンラッ』

懐ろから手を出すと私は思はず『キャッ』と云つて一時眼もくらむので、折柄丁度お稽古から歸つて、好きか美津山か何かの琴歌を歌ひながら入つて來た八重ちゃんか。

『アラ、アラ、アラ』

大きいものではありません、これが他のものから可愛らしい部類に入れられるのでせうが、小憎らしい首を真直ぐに押立て、長い舌を忙しかく吐きながら猫板の上にまあるくうすを巻いた、其不氣味さつたらありません、奥さんはいさかり鐵瓶を執つた儘起上つて、

たゞ其處いらをうろく。此時からキーちゃんは何ぞと云へば蛇を使つておごかすので、暑くるしいと云つては、裏の土手から長いのをつかんで來て頭に巻いたりかんか随分亂暴なまね計り。もしもの事があつては悪いからと散々云つて聞ききまきませんでしたが、這度と云ふ這度は到頭……

それにしても今頃は如何してゐるでせう。

——完——